性的人間大江健三郎

性的人間

定価は帯またはカバーに表示してあります。

新潮文庫 草126 D

昭和四十三年四月二十五日 発行
昭和四十六年二月十日 七刷

著者 大江健三郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替 東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

㊗ 印刷・光邦印刷株式会社 製本・大進堂製本所
© Kenzaburô Ôe 1968 Printed in Japan

新潮文庫

性的人間

大江健三郎著

新潮社版

1813

目次

性的人間……七
セヴンティーン……二七
共同生活……一九

解説　渡辺広士

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

性的人間

性的人間

1

暗闇のなかを象牙色の大きなジャガーが岬の稜の突端まで疾走してくる。ジャガーは夜の海にむかって右に、滝のように不意に急勾配の降り坂となった枝道へはいりこみ、岬の南側に脇の下のようにかくれている耳梨湾にむかった。ジャガーはアリフレクス16ミリを積んでいる。車も、撮影機も、みんなからJと呼ばれている二十九歳の青年のものだ。J、その妻、ジャガーを運転しているJの妹、中年男のカメラマン、若い詩人、二十歳の俳優と十八歳のジャズ・シンガー、その七人がジャガーに乗ってJの別荘にむかうところだ。Jの妻がつくっている短篇映画のいくつかのシーンをとるために。

ジャズ・シンガーの娘はすっかり裸だ。彼女は酔って歌っている。それからみんなが彼女の歌を注意深くきかないので自分がそのジャガーの中の誰からも軽蔑されているという強迫観念にとらえられていつか好評をはくしたことのある露骨な話をもういちどためしてみようとする。東京から四時間、車を走らせているあいだ、運転しているJの妹をのぞいてほかの者はみな始終、ウィスキーを飲んでいたのだが、その十八歳の歌手が、まず最初に、仲間たちの酔いの戦列から、ひとり早駈けしたのだった。それは、いつものことだった。彼女には自制心が欠けていた。

「わたしが政治家のパーティに仕事に行った時のことなのよ。わたしと一緒の控え室に化粧もし

ていない十六歳の子が、ピンポンの球と青いビニールの衣裳を膝において坐っていたのね。そこでわたしたちは友達になったわけよ。仕事の順番がきてもその子はお化粧しなかったのよ。裸になるだけ。そして青いビニールの寝袋みたいな服に頭からはいこんで、わたしに背なかの下半分だけについているジッパーをあげさせたわ。その青い服は、蛙の衣裳なのよ、体じゅうすっぽりくるんで、股だけ魚の口みたいな穴がひらいているのよ。政治家たちは、女の子の性器をした青い蛙を見るわけ、しかもピンポンの球を体にいれていて、それが踊りにあわせてブル、ブル、蛙みたいに鳴くわけよ！」

残りの六人が憂鬱に声をあげて笑った。それはもしここで笑わなければ歌手が泣いて暴れはじめるのをみな知っていたからだ。みんなの笑い声に上機嫌になって歌手は、

「その子の蛙ダンスの技術はすばらしいものなのよ、ほんとうにすばらしい技術なのよ」といって誇らしげに聴き手たちを見まわしサスペンスをかもしだそうとした。

「パーティの政治家たちは、技術を見たんじゃない、十六の娘がどんなに恥しらずになれるか、ということを見たのさ」と運転している妹の脇に妻とならんで坐っているJがいった。「どんな種類の、わいせつなショウでも、それはかわらないよ。技術を見せて、そのかわり恥ずかしい自分の肉体は透明にする、ということはできないさ。観客が見たいのは、恥しらずな肉体そのもの、恥そのものなんだから！」

十八歳のジャズ・シンガーは失望し、不機嫌になり、すすり泣きはじめた。Jと歌手とが性関係をもっていることはJの妻もふくめて、誰もが知っていた。そこでますます憂わしげに十八歳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の娘は裸の肩をふるわせて泣いた。もしそれが車のなかでなければ、彼女はナイフか砕けた瓶をもって、恐怖にかられた猫のように暴れただろう。

「なぜ、意地悪するのよ、それに、暗くて道もまがりくねっているんだし、すこし静かにしてくれたらどうなの？　小屋につくまえに死にたいの？　あなたたちの映画を完成することもなく」と運転しながら妹はJをなじった。彼女は自分の兄が奇妙に心理関係のいりくんだ意地悪をすることに耐えられないのだった。

そこでJの妹と泣く娘のほかは、みんなわずかに微笑して黙りこみ、酒を飲み、車のエンジンの音と自分の内部の音を聞いた。なぜ微笑しているのかは誰も考えてみなかった。かれらはいつも黙りこむときには余裕ありげに微笑した。ジャガーは坂をくだりきって湾の右の翼に入りこみ、左の翼にむかって耳梨村の狭い石畳の道を徐行した。

「窓をしめてくれない？　死んだ魚や網の臭いが厭なのよ、みんなは平気なの？」とJの妹がいった。

残りの者たちの誰か二人が窓をとざした。

「こんなに注意して走っても、明日の朝みれば、いくつかの引っかき傷はあるのよ」とJの妹は兄にむかって嘆くようにいった。「なぜ、あなたが運転してくれないの？　あなたは運転の天才なのに」

「酔っていて危いよ、海におちるよ」とJは微笑したまま脣もうごかさずにこたえた。

石畳の道を走る車は、海水のみなぎっている短い掘割をたびたびわたった。道は湾のすぐ内側

をゆるやかに彎曲して聚落の端と端とをむすんでいる。道の両脇の家屋群は死んだ象の列のようだ。濃い灰色でそれ自体の内部にむかってすっぽり閉ざされた印象の家屋群。燈は掘割の向うの海の方角からわずかな光をなげかけてくる。碇泊している漁船の標識の燈だ。家屋群は、影のなかにある。

ジャガーは凪いだ海の音よりもなおひそやかな音をたてて徐行していた。そして不意に、石畳の前方に、人々の群をヘッド・ライトがとらえた。運転している娘がブレーキを踏む。シートから酒瓶が転げおちて音をたてる。十八歳の歌手は泣きやめて罵ろうとするが、結局黙ってしまう。ジャガーのなかのすべてのものが好奇心にかられてヘッド・ライトに照らしだされている人人を眺めた。

突然強い光のなかで盲の地鼠のようにたじろいでいる三十人ほどの漁民たち。おもに女たちだ。数人の老人たちと子供たちがそれにまじっている。女たちはみなアイヌ人のように濃く暗い色の厚司を着こんでいて、誰もおなじ年齢、中年のように見える。みな昂揚し苛だち不機嫌な中年女たちの集団。ヘッド・ライトはすべての者の顔をみにくく動物的に、卑小に見せる。人々は敷石道をいっぱいにうずめて一軒の家の前にたたずんでいる。いまはすべての顔がジャガーに向けてふりかえられているが一瞬前まではすべての眼がその家を見つめていたことが確かに感じられる。

「ケイコを隠して。座席の前に屈みこませて上着を頭からかけてやって！」とJの妹がいった。

サワ・ケイコというのがジャズ・シンガーの名前だ。ケイコは素直にしたがった。前のシート

の背に脇腹と腰とをおしつけてひざまずいた娘の裸の小さな体が上着やらスカートやらでおおわれる。車がふたたび動きだしたとき倒れないように、後部座席の残りの三人がその膝でサワ・ケイコを支えている。ジャガーは徐行して人々にむかう。Jがためらいがちに腕をクラクションへのばしたとき、Jの妹は怯えたような声で、しかしきびしく兄を制して、

「だめよ、そんなことしたら、車をひっくりかえされて焼かれるわ。あの人たちは、いま自分のほうから動こうとしているのよ！」といった。

ジャガーが接近すると確かに人々は静かにスムーズに敷石道の両側の家々の軒先にしりぞいた。そのときかれらはもう、車とそのなかの七人にたいして好奇心をいだいていないようだった。むしろまったく無関心にさえ見えた。車のなかの者もそれにならおうとしたがうずくまっている裸の娘は震えていた。車が人々のあいだをとおりぬけるときはじめて、皆が見まもっていたその聚落の海がわのその家だけ、開かれた二階の窓のむこうに燈がともっており、それが敷石道やら人々の顔やらをあかるませているのがわかった。

そこを通りぬけるとジャガーは速度を早めた。はじめみんな鬱屈したように黙っていた。かれらはみなおびやかされたような気分だった。そしてこういうときつねに、沈黙や緊張を解消させる役割の中年男のカメラ技師が豪傑笑いをして、こういった。いったん笑うとなるとかれは豪傑笑いしかできないのだ。

「こちらから刺戟さえしなければなにもしない原住民の部落をとおりすぎる探検隊みたいだったじゃないか？　おれはボルネオへ教育映画をとりに行ったときのことを思いだしたぜ！　また、

西部劇のことも思いだしたなあ」

サワ・ケイコは裸の体をおこし、カメラマンの肥った短い膝の上に尻をおちつけた。そしていくらか酔いのさめた沈んだ声で、あの連中、インディアン？　などと甘ったれたことをいっていた。

「あの人たちは、この村の住民よ。男たちは漁に出ているから、きっとこの村に残っている全員があそこに集っていたんじゃない？　わたしはこの湾の人たちのいろんな頭を粘土でつくったわよ」とJの妹がいった。彼女は二十七歳で彫刻家だ、この夏のはじめパリからかえってきた。彼女はJ夫婦のつくる映画の美術を担当するだろう。

「車をとめて明日の魚をたのんでおけばよかったじゃないか？」とJが非難した。

「あなたは、この湾の村のことをなにもしらないのよ。わたしたちが疎開してきていたとき、あなたは家のなかで絵をかいてばかりいて、この湾までおりてくることを恐がっていたから！　漁師の子を怖れて！」

ジャガーは敷石道を聚落のはずれまで来て、低い防波堤の向うに胆汁のように黒っぽく翳った海を見おろしながら迂回した。ジャガーは再び坂をのぼりはじめる。潮風に負けた灌木の枝が、暴力的にねじまげられた腕のような苦しげな形でジャガーのフロントグラスにむかってさしのべられる。それらに叩かれてジャガーは音をたて、車のなかの七人は一瞬、驟雨のなかに閉ざされたような気分になった。

「漁師の子供は恐くなかったよ。ただ、うちの家族が、山の上に地所と小屋とをもっているだけ

で、湾の連中に怖れられているのが厭だったから、おりて行かなかったんだよ。きみよりおれのほうが鈍感でなかったのさ」とJ。

「昂奮してびっくりして憤激している顔だったわね、たとえば、性交しているところを他人に見つけられたみたいな！」とサワ・ケイコがいった。

そこで運転している娘のほかの六人は笑った。

「ケイコなら、性交しているところを他人に見つけられても平気だろう？　しかし、ケイコの観察力は時どき正確だよ」とカメラマンがいった。

「あの人たちは、姦通した女を辱しめにきていたのよ」とJの妹が、兄にだけささやきかけるように低い憂鬱な声でいった。「わたしたちが疎開してきていたときにもこういうことがあったわ。あの家に姦通した女がかくれているのよ。家の出入口は板でうちつけられているんだと思うわ。今夜はあの人たちのかげになって見えなかったけど」

「真夜中に集ってきてどうするんだ？　辱しめるといっても、なあ？」

「ただ、じっと家のまえに立っているだけよ、村じゅうの女たちや老人や子供が！　それに男たちがいるときは、男たちまで！　それで充分に辱しめることじゃない？　胸が悪くなる、思ってみるだけで」

「そうだよ、おれも胸が悪くなる、厭だよ、姦通くらいで！」と後部座席の二十歳の俳優がいった。

「ぼうやも毎晩、自分のアパートのまえに東京中の人間におしかけられては、胸が悪くなるさ！」

とカメラマンがいった。

「ほんとに、ぼうやには百人もの夫が姦通されているんだからねえ」と裸のジャズ・シンガーが俳優を年下あつかいしていった。

ジャガーは九十九折りの坂道をのぼり、湾をかこむ聚落を不意に真下に見おろす高台に出ていた。

「ああ、車をとめてよ、連中が囲んでいた家の二階の窓に燈がついていたね。なにか見えるんじゃない？」とカメラマンがいった。

七人はジャガーの外に出た。サワ・ケイコはシートに敷いてあった毛布をメキシコのポンチョのように肩にはおっていた。カメラマンが撮影用のレンズをたちまち組みあわせて望遠鏡をつくった。かれは教育映画や宣伝用のフィルムをつくる会社につとめているが、古風な蛮からタイプで同僚と協調しない、企業内のアウトサイダーだ。会社で認められず出世できないことがはっきりすると、かれは口髭を生やしグレイの背広のかわりに汚れたセーターを着こみオールド・ファッションの車に乗り、こまごました発明に熱中した。たとえば望遠鏡レンズを組みあわせたりすることだ。またかれは若い友人たちが映画をつくるということをきくと家族も会社の仕事も二の次にしてそれに熱情をかたむけ、この不確かな仕事に献身した。かれは大いなる欲求不満の四十男だった。鋭い才能があるというのではなかったが、じつに善い人間で、酒飲みだったが怠情ではなかった。会社の仕事に今はもう興味をひかれていないにしてもそれをなおざりにはしなかった。明日も、夜明け方の一時間の撮影がおわれば、かれは独りだけでも車を運転して、東京の会

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com